

研究ノート

在日百年のファミリー・ライフストーリー 河家の場合【第三部：末子さんの少女時代】

猿 橋 順 子*

1. はじめに

本稿は、同タイトルの第一部「渡日から「千里」創業まで」、第二部「二世から三世へ」の続編である。朝鮮半島全羅南道光州から 1925 年に渡日した河永俊さん（1889-1961）と、その数年後に長女を連れて渡日した金松亭さん（1896-1985）夫婦は、東京都世田谷区上馬で生活を営み、1965 年に焼肉店「千里」を創業、現在は三世・四世・五世の世代がともに暮らしている。

本稿で紹介する河末子（ハ・マルチャ）さんは、永俊さん、松亭さん夫婦の次女として 1936 年に生まれた（インタビュー時、88 歳）。結婚（1959 年）を機に転居したため、世田谷で暮らしたのは、結婚までの 23 年間ということになる。末子さんは結婚後、子どもを五人出産し、子育てと夫が経営するパチンコ店を支える日々となった。そのため、実家との行き来が（本人が思い描いていたほどには）頻繁ではなかったと言うが、河家の家族史の中で、末子さんの存在は大きいし、末子さんのインタビューを終え、ふり返ってみても、河家にとって大事な局面で末子さんの関わりがあったことに相違ない。

また、戦前から戦中、解放という激動の時代を、物心がつく年齢に生き、日本の皇民化教育から朝鮮人としての民族教育への移行を学齢期に経験し、東京

* 青山学院大学国際政治経済学部教授

の都市化と日本の高度経済成長の中で、朝鮮学校、民族団体（朝鮮総連ほか）、故郷がある韓国のはざままで在日韓国・朝鮮人二世として生きた、ひとりの在日コリアン女性の生活史そのものが貴重である。2024年秋に実施したライフストーリー・インタビューの記録は40頁に及ぶものとなっているが、本稿では、その初期（1940年代）にあたる末子さんの少女時代のものがたりを纏める。

2. インタビューの経緯

筆者がこれまで行ってきた、河家五世代にわたるライフストーリー・インタビューの中で、末子さんと、末子さんの今は亡き夫（南鐘祐さん、1925-2009、在日コリアン一世、1941年渡日）は、時折、重要で大切な存在として語られた。應烈さん（末子さんの兄）・順子さん夫婦の長男として生まれた孝成さんは、現在、河家の家長であるが、13歳年上の叔母である末子さんに可愛がられて育った記憶をしばしば語る。大人になってからは、「コモ」（叔母さんという意味の朝鮮語）と呼んでいるが、幼少期の記憶の語りでは「姉さん」と呼んでおり、文字どおり末子さんは姉のような存在だった。孝成さんが結婚を決めた英愛さんの紹介は、両親よりも先に末子さんにした。「いつも味方になってくれる」心強い存在だからである。

孝成さん・英愛さんの長男の明樹さんも、小さい頃から、よく大叔母の家に一人で泊まりに行ったという。中学生になってからは、北区十条にある東京朝鮮中高級学校にほど近い末子さんの家に、より繁く訪れたそうだ。末子さんは、五人の子どもの子育てに加え、夫が経営するパチンコ店が自宅に隣接しており、住み込みの従業員の世話をはじめ、担うべき仕事が多かった。だから、世田谷にある実家に帰るよりも、末子さんの家に、ことあるごとに河家の人びとが訪ねていたようである。あるいは家族旅行を一緒にする、連れ立って出かけるという機会も多くあった。末子さんの五人の子ども達は、それぞれに世帯をもち、2024年現在、末子さんには十一人の孫がいる。

在日コリアンの家庭では、朝鮮社会が備える伝統的・因習的な家父長制の影響もあり、家にかかわる重要な判断や報告は、男性に委ねられる傾向にある。

それでも末子さんは「河家の長老」と目されている。「河家のことを知るには、末子さんに聞くのが一番よい」というのは、河家の方々のインタビューの中で、折に触れて指摘されてきたことである。

実際には、コロナ禍や末子さんの健康上の理由で、なかなかインタビューを実現させることができなかった。持病のリウマチが悪化し、歩行をはじめ日常生活が困難になってしまったため、かかりつけの病院の病床が空くまで、医療付の介護老人保健施設に入所していた。2024年10月に施設から末子さんの外出許可（最大三時間）が下り、お引き合わせいただいたのは、（お会いしてはじめて知ったことだが）入院の数日前だった。

末子さんを囲んで、河家の皆さんと食事をしながら、親族同士の近況報告、筆者の紹介、家族史を編むことになった経緯、河家の各人がインタビューを受けた中で末子さんに確認したかったことなどをお聞きすれば、三時間はあっという間であった。実際に入院してみなければ確かなことは言えないが、筆者が面会時間に来られるのであれば、話の続きをしましょうということになった。ショートメールのアドレスを交換し、後日、インタビュー日程や時間の調整を行うこととした。

3. インタビューの方法

入院中という特殊な状況の中で、ライフストーリー・インタビューが実現したこと自体が、稀なことである。インタビューを設定するまでの過程は、末子さんの人柄や語りを理解する上でも、方法論上の検討を行う上でも必要になると考えられるため、記録しておく。

末子さんへのインタビューは、2024年10月から11月にかけて、板橋区内の病院で、週に一度のペースで計8回実施した。88歳の末子さんは、50代なかばに発症したリウマチの治療のために入院していた。病院の規定により、14時～16時の間で20分と定められていた面会時間に行った。最初の2回は規定時間内で打ち切られたが、末子さんの健康状態、体調などから徐々に面会時間を延ばすことができ、後半は45分程のインタビューとなることもあった。

倫理的な手続きとして、事前にインタビューの趣旨を説明し、同意を得た上でボイスレコーダーに録音した¹⁾。期間中、2回、文字化した記録を手渡し、内容の確認をしていただいた。記録を読むことによって思い出された出来事を話されることもあった²⁾。

筆者は毎回、同時刻に訪れるようにしていたが、受付を済ませ、病室のある階のナースステーションに立ち寄り、面会者の名前を告げると医療スタッフが病室まで随行する。末子さんの病室はフロアの一番端にあり、そのため出入口前の廊下は行き止まりになっていた。通常、見舞い人はベッド脇で話をするか、談話室に連れ立って行く。末子さんは、人の出入りが多くテレビが終始ついている談話室も、四床相部屋の病室もインタビューには適さないと判断され、病室前の廊下の突き当たり部分をインタビューの場所として設定し、筆者用の椅子を用意してくださっていた。

病室内に据え置かれている見舞人用の椅子は、小さく軽量の丸椅子で、談話室に置かれている椅子は、肘付の重い椅子である。その肘付椅子をスタッフに頼み、一脚準備してくださっていた。談話室と末子さんの病室は、フロアの対角線上、最も遠い位置にあるので、筆者専用の肘付椅子は、末子さんの病室の隅に置かれたままとなった。筆者が到着するすこし前に、誰かが廊下に出しておいてくれるわけだが、ある時、約束の時間よりすこし早めに到着すると、車椅子に乗った末子さんが、すこしずつその重たい肘付椅子を廊下に押し出しているところだった。筆者を案内していた医療スタッフは「遠慮しないでナースコールしてください」と言ったし、それ以前に、私自身が自分で運べば造作な

1) 青山学院大学「人を対象とする研究」の審査を受けた上で、そこに定めた調査手続きに則っている(課題番号:青19-32)。また、初めて末子さんにお目にかかった時(2024年10月)は、第一部の校正作業中だったため再校のコピーをお渡しし、この「ファミリー・ライフストーリー」企画の一端をお見せした。第一部の内容もご確認いただき、ご指摘に沿って校正時に修正を行った箇所もあった。

2) インタビュー記録を、比較的頻繁に文字におこし、内容の確認と、そこから生まれる新たな語りを採録していく手順は、この「ファミリー・ライフストーリー」における手法上の特徴としている(猿橋2024, p.139)。そのような手順を踏むことの意義と課題については、稿を改めて論じたい。

いことなのである。そもそも、軽量の丸椅子で何の支障もないのである。末子さんは、すこしでも居心地のよい環境を作り出そうと心も身も砕いて準備してくださっていた。

また、訪問した際にリハビリ中ということもあった。医療スタッフから談話室で待つようにと言われて向かったが、談話室からはリハビリに取り組む末子さんの姿が認められた。歩行器を使つての歩行訓練をリハビリテーションスタッフに付き添われて行っていた。汗をかき、頬を紅潮させ、前を見据えてリハビリに取り組む末子さんの姿は、インタビュー時の穏やかな表情とは異なり、心身全体で取り組んでいることが伝わってきた。リハビリを終えた末子さんは、額の汗を拭きながら筆者を待たせたことを詫びたが、インタビューをさせていただきに邪魔している側としては何の問題もあろうはずがない。そればかりか、談話室の様子を知ることができたし³⁾、この日を境に、医療スタッフの方々が面会時間の制限について「大目に見てくれる」ようになったようにも感じている。もちろん、末子さんの体調が良い方向に向かっていたことが、長めのインタビュー時間が得られた最大の理由であった。

このように、筆者の知らないところで、末子さんはじめ、いろいろな人たちの調整や配慮があって、インタビューが実現し得たのだと思っている。こうしたインタビューの在り方について、方法論的にも倫理的にも賛否両論あるところだろう。言葉では「無理のないように」と繰り返し伝えるものの、インタビューにはいつでも応じる側の負担がつきものである。今回はご高齢であることに加え、病氣療養中であるということで、ご本人の負担が、とりわけ過剰であったことが否めない。

他方で、実際のところ筆者には、この機会を逸してはならないという直観もあり、その感覚に突き動かされていた面もあった。稿を改めて記述するが、末子さんは18歳の時に結核に罹患し、療養所での2年間に及ぶ療養生活を経験

3) 確かに、院内の談話室はインタビューが行える環境ではないということを確認した。また、そこに集まっていた入院患者と医療スタッフの言動とやりとりから、河末子さんがその中にある入院生活の様子をうかがい知ることが出来た。

している。病の語りが多くなったことは、入院中に行ったインタビューという事情が関連しているかもしれない。インタビュー場面の設定をめぐる批判は、真摯に受けとめることとして、末子さんと彼女を取り巻く人たちの尽力のもとで実現したインタビューを記録し、考察していきたいと思う。

インタビューは思い出されたところからお話いただいた。終了後は逐語録を作成した上で、ストーリー毎に区切り、内容に合致した小見出しを付した。それらを起きた出来事の順序に並べ換えた。以上の編集をほどこした版について、末子さんにご確認いただき、指摘に基づき修正した。修正は固有名詞の表記や韓国・朝鮮語の訳し方等、最低限のもので、ショートメールにて追加の補足説明を受け取ることもあった。以下に続くライフストーリーは、そうしてまとめられたインタビュー記録から抜粋して構成している。すでに第一部、第二部で書き記したと重複する内容は割愛した。ただし、同じ出来事でも視点や解釈が異なるものについては掲載している。

河末子さんのライフストーリー（少女時代）

河末子（ハ・マルチャ）さんは、河永俊さん（1889～1961、郷里は全羅南道光州、1925年渡日）と金松亭さん（1896～1985、1928年渡日）の次女として1936年に生まれた（図1参照）。幼少期、末子さんは12歳年上の姉（應禮さん、1924～2013、1928年に母とともに渡日）、日本で生まれた二人の兄（應烈さん、1929年生まれ。應大さん、1932年生まれ）の六人家族だった。

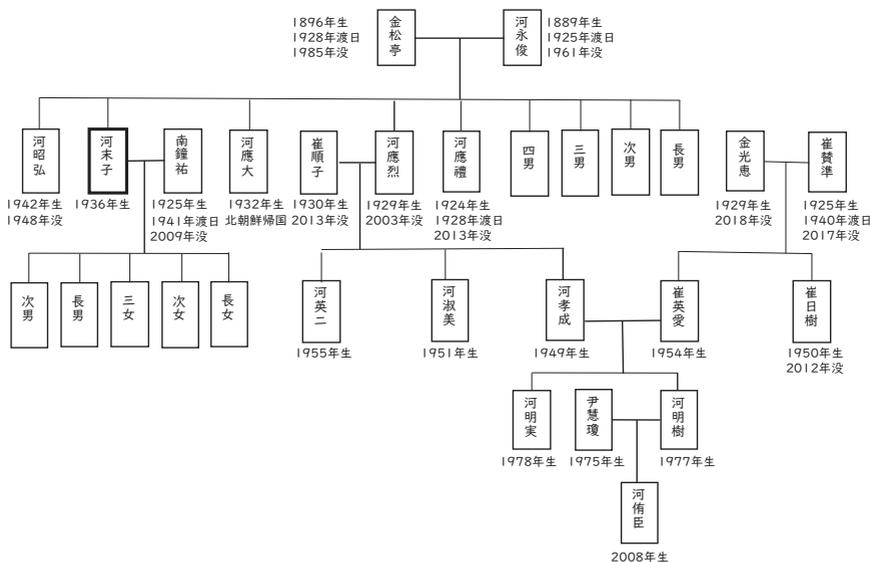


図1：河家の家系図⁴⁾

松亭さんは40歳で末子さんを出産した。親に「末子」という名前の由来を聞いたことはない。末子さんは「これで最後、末っ子だと思ってつけたのかしら」と推測する。「あんまり考えなかったんじゃないかな」とも言う。日本の

4) 河末子さんを太枠で示している。

植民地支配下であって、その当時、田畑が広がる世田谷に暮らすことになった河家では、子ども達に日本風の名前もつけていた。長女の應禮さんは「花子」、應烈さんは「正太郎」、應大さんは「和一」といった。末子さんには二通りの名前がない。両親は、末子さんに、朝鮮語でも日本語でも通りのよい名前を選んだのかもしれない。

(1) 世田谷での生活 (1940年頃)

東京都世田谷区が刊行した『新修世田谷区史』によると、兵營の設置、拡大によって区内の産業構造に変化が認められるようになるのは、1910年代半ば頃からと記録されている。その一例として、農産物の共同出荷が挙げられている⁵⁾。とはいえ、人びとの暮らしに、その変化が実感として伴っていたわけではなく、砂利運搬用に敷設された玉川電車が、旅客を乗せるようになったといっても、村人達はほとんどこれを利用することもなかったのだという。兵營が拡張されるに従い、軍に従事する世帯が次々と流入したが、彼らは渋谷に住居を構え(後に世田谷の宅地化に変遷していくことになる)、当初は渋谷から世田谷へ電車で通勤するという人の流れをつくりだしていた。

学齢人口の増加に対応するため、公立・私立⁶⁾ともに学校が新たに創設されたが、こと高等教育については、軍関係者の師弟たちが通うもので農民達には遠い存在であった。隣接する渋谷の都市化にも追随するように世田谷も発展し、建設工事に要する労働者を広く受入れるようになる。1925年に「人夫」として世田谷の地に暮らし始めた末子さんの父の河永俊さんは、こうした渋谷・世田谷の発展の中で、身分としては「人夫(単純肉体労働者)」として、半分は故郷でそうであったように農民として一家の生活を支えたのであろうと推察される。

5) 東京都世田谷区『新修世田谷区史(下巻)』1962年、p.272。

6) 一例として国士館中学校が大正12(1923)年に、国士館商業学校(夜間)が翌1924年に開設された。

[抜粋1：1940年頃の暮らし]

住まいは4軒長屋のひとつで、うちが一番端でした。後ろの方に自転車とかを置く物置のような、倉庫のようなところがあったんです。井戸もあって、お風呂もそこでした。外から見えないように囲いをしただけの簡単な作りのお風呂でしたけど。すこしでも土地があれば、トマト、ナス、キュウリぐらいはどこの家も育てていました。朝、母に「ナスを取ってきて」って言われたらハサミを持って取りに行くんです。それを味噌汁の具にする。近所で、広い土地をもっている人に、土地を借りて、スイカや黄色い瓜も作っていました。家の裏に川⁷⁾が流れていて、その土手に生えている野草でも、母は食べられるものを見分けてナムルにしていました。そう考えると、昔は贅沢ではないけれど、暮らしがのどかでした。なんでも自分でつくる。自分たちで育てて収穫して食べていました。今みたいに、何でもお店で買うという時代ではありません。

軍事施設が拡張されていった世田谷は、やがて「軍隊の町のような様相」⁸⁾を呈し、人びとの生活も軍との密着度を高めていく。昭和12(1937)年の日中戦争の始まりから、成年男子を中心とした召集徴用、ガソリンの配給制限などにより、瞬く間に農作物不足が東京のみならず全国に広がった。追い打ちをかけるように、1939年には西日本から朝鮮にかけて広範囲に干ばつがあり、米の不作、米価格の高騰に見舞われた。末子さんが子どもの頃の記憶として語る暮らしの様子(抜粋1)は、『世田谷区史』に描写された戦時体制に向かう世田谷の状況の記述にも符合する。

農地をつぶして宅地化したものを再び農地にするもの、植木畑や桑畑を食糧増産に転換させるものなどがそれぞれであるが、農耕の主体をなすものは一家の主人や男手は少なく、大部分が主婦や老人の手にゆだねられた。一家の主な

7) 蛇崩川。現在は暗渠で遊歩道となっている。

8) 前掲書、p.690。

働き手は、戦場に、工場に、会社に動員され徴用されてしまったからである。

〔『新修世田谷区史（下）』1962, p.694〕

全国的に食糧不足が深刻化した1939年という年を、河家の家族構成に照らして見れば、父の永俊さんは50歳を迎えている。「人夫」としての作業は身にこたえる年齢だったことだろう。長女の應禮さんは15歳で、前年に駒沢尋常高等小学校高等科⁹⁾を卒業し、東京中央電話局で働き始めた¹⁰⁾。長男の應烈さんは10歳、次男の應大さんは7歳の小学生、末子さん3歳ということになる。食糧事情はさらに厳しさを増し、昭和16(1941)年から東京都は全国に先がけ、米の配給制度を始める。

以下の語りは、もうすこし年を経てからの記憶であろう。

[抜粋2：戦争の影響、食糧不足と徴用]

だんだん食糧が不足するようになると、毎日おそうめんでした。私は毎日そうめんでも大丈夫です。上の兄（應烈さん）が学校からの徴用で蒲田の方に行くようになりました。どんな仕事をしていたのか、詳しくは知りません。そこから帰ってくると母が白いご飯を炊くんですね。それは切ない思い出です。……キムチも漬けていました。食糧がないとき、キムチが好きな人にわけてあげていましたから、日本のことばがわからないのに、母は近所の人からも「かわさん、かわさん」って慕われていました。今思うとそれが不思議なんです。ことばが通じなくても伝わる何かがあるのかしらと思います。

9) 現在の中学2年までに相当する。

10) 1938年から1941年までの3年間、電話局に勤務したことが、河應禮さんが、1989年（当時65歳）に日本人女性の自主的な学習会「世田谷未知の会」に呼ばれ、講演した「戦中、戦後を日本に生きて——65年間の人生をふり返り」に記録されている。講演録は、應禮さんの没後、遺品のなかにあった手書きの講演原稿を見つけた遺族が「忠実に書き起こし」、2021年5月16日に執り行った河應禮さんの八回忌で参列者に配布した。

学校教育では、昭和10(1935)年ぐらいから全国的に国粹主義的な教育が導入されるようになり、昭和15(1940)年には「小学校児童といえども、重要な戦力の一端としての扱いを受け」¹¹⁾ となる。翌16(1941)年には尋常小学校が国民学校と改められ、尋常小学校高等科の2年分が必修となった。とはいえ学修内容は「錬成」が中心で、学童といえども清掃、夜警、廃品回収などの勤労奉仕に駆り出された。同年、従来からあった青年学校について、中学校実業学校に進学しない者はすべてここに入学し、19歳まで訓練を受けることとされたが、それは成年男子の徴兵検査への接続を意味していた。そのような日本の教育環境において、末子さんは1年生から3年生まで学校に通い、兄の應烈さんは十代前半で「学校からの徴用で蒲田の方」(抜粋2：下線部)へ戦争を支える学徒として駆り出されたということである。

家の中で、どのような言葉が使われていたかを尋ねた。

[抜粋3：家の中のことば]

両親は朝鮮語、故郷のことばで話していたと思います。私に対しては日本語と半々。だから、外で母から覚えたことばで話すと、近所の人から「全羅道だね」と言われることがありました。それから、母は悲しいことがあると、泣きながら歌っていました。昔の朝鮮の女性はみなそうしたんです。自分の運命を嘆いて、身世打鈴(シンセタリョン)ですね。それは故郷のことばだったと思うのですが、私には何を言っているかわからなかった。ただ、とてもつらい、悲しいという気持ちが伝わってきました。

30歳を過ぎて日本に移り住んだ永俊さんと松亭さんは、夫婦の会話は「故郷(光州)のことば」だった。他方で、性格が穏やかな父は口数も少なく、家の中でおしゃべりをするのは、母と姉と末子さんの三人ということが多かったそう。日本に移り住んで10年近くが経ち、母は日本語まじりの朝鮮語を話

11) 前掲書, p.702。

す。朝鮮で生まれ、母と二人で渡日した姉の應禮さんは、日本で学校教育を受けているとはいえ、母語の朝鮮語をある程度維持していたことだろう。少なくとも母の話す朝鮮語を理解することは十分出来たであろうと考えられる。おそらく、姉の應禮さんの橋渡しで、三人はおしゃべりに花を咲かせることができたのだろう。

幼い末子さんは、光州のことばと世田谷のことばの境目を意識せずに身につけた。だからこそ、近所の人は末子さんの故郷を言い当てることができたのだろう。さらにこの語りから、河家の近所には、河家と同郷の人も、朝鮮半島の別の地域から来た人たちも混ざって暮らしていたということがうかがえる。

(2) 戦災 (1944～45年)

東京が初めて米軍の空襲を受けたのは昭和17(1942)年で、年を追う毎にその熾烈さが増していった。世田谷が空襲被害を受けたのは、昭和19(1944)年11月28日、翌20(1945)年の2月16日、19日、3月10日、4月15日、5月24日、25日と記録されている。とりわけ「東京下町を焼き尽くした」と表現される3月10日の大空襲では、その4年前(1941年)に結婚して江東区に暮らしていた姉の應禮さん夫婦が焼け出され、実家に身を寄せることになる¹²⁾。

[抜粋4：1945年3月10日、東京大空襲]

上馬も三軒茶屋も空襲で焼けたんです。うちがあった一角だけが奇跡的に焼けなかったんです。翌朝、焼け出された人たちが次々と荷押し車をひきながら、黙々と歩いて行くのを目にしました。その時、姉は結婚して家にはいませんでした。義兄は床屋をやっていたんです。そちらもひどい空襲がありました。3日間連絡が取れなかった。「もうだめだろう」と話していたとき、帰ってきました。顔が真っ黒にすすけていました。3日間、歩き続けてきた

12) 前掲の應禮さんの講演録にも空襲被害によって、家財を失い、転居を数回余儀なくされたことが詳細に記されている。

んです。姉の家は墨田川の近くで、火事から逃げまどう人びとが川に飛び込んで、そのまま溺れてしまうのを見たと話していました。本当に戦争はやっぱりいけないことだと思います。

戦時下で大変な暮らしではあったが、1942年に松亭さんは三男を出産していた。新しい命は「昭弘」と名づけられた。末子さんにとっては6歳年下の弟の誕生である。他方で、家族が増え、生活を成り立たせなくてはならない。娘夫婦が空襲で焼け出され、共に暮らすことになったことをきっかけに、松亭さんは千葉の飯場に出稼ぎに出たという。

[抜粋5：母の出稼ぎと仕送り]

姉夫婦が空襲で焼け出されて実家で暮らすようになってから、母は飯場で料理をつくる仕事に行くようになりました。姉に家のことを任せて、下の子（昭弘さん）だけおんぶして行きました。飯場はしっかりとした記憶ではないんですけど、千葉の八街（やちまた）だったかと思います。落花生がたくさん送られてきたのを覚えています。それも押し入れにいっぱいというぐらい。押し入れにためておいて、すこしずつ出して食べました。それから梅干しのジャム。とっても美味しくて、ご飯にのせて食べました。

末子さんの記憶には、母が出稼ぎ先から送ってくれる食べ物の記憶が鮮明だが、そこで得た給金を仕送りしていたことだろう。松亭さんは、その生涯で十人の出産をした。家系図に記載されていないが、應烈さんと應大さんの間にも妊娠・出産をしたが、生まれて間もなく亡くなったのだという。十番目の子ども（昭弘さん）を46歳で出産し、その子をおぶって出稼ぎに出て現金収入を得、手に入る保存に耐えうる農作物や加工品を家に送り、一家の食い扶持をつないだのである。

(3) 解放直後の暮らし

日本が無条件降伏をし、朝鮮半島が植民地支配から解放されたときのことを末子さんはあまり明確に区別して語らない。在日朝鮮人史には祖国への帰還、民族団体の発足、民族教育の始動などで沸き立つ様子が記されている。9歳で解放を迎えた末子さんも上馬につくられた「寺子屋」(国語講習所)に通い始める。しかし、その時の記憶の語りからは、解放を祝う民族同胞というより、恐れ、困惑する少女の姿が見て取れる。

[抜粋6：寺子屋]

戦争が終わって、寺子屋に行き始めました。あの頃、定かではありませんが四十人ぐらい集まっていたと思います。最初に先生が名前を呼ぶときに、私は自分の名前が「ハマルチャ」だって知らなかったんです。「かわすえこ」だとずっと思っていた。「河」が「ハ」ということは知っていましたが、「末子」が「マルチャ」って知らなかったんです。教える先生が、年配の厳しい先生で、長い棒をもって「自分の名前も知らないのか！」って怒鳴ってパシッパシッとたたくんです。それで恐怖で行かなくなってしまいました。だからといって日本の学校へも行かないから、しばらく学校に行かない時期がありました。

それまで抑圧されていた朝鮮語、民族としての誇りを取り戻すための活動が一気に加速し、帰国する人びとが退去していく中で、にわかに朝鮮語の教員となった人には焦る気持ちもあったことだろう。熱を帯びる指導も、若い末子さんにとっては「恐怖」だった。集まった子ども達の名前を呼ぶとき、それは教育のほんの入り口である。入り口をくぐる前の段階と言ってもよいだろう。その時点で、末子さんは躓いてしまったのである。

家では、両親も長兄も一家の生計を支えるのに精一杯だった。両親は東京都の失業対策事業(1949年～)に応じたが、やがて父は身体をこわしてしまう。家計を支える中心となったのは、16歳で解放を迎えた兄の應烈さんだった。

[抜粋7；戦後の仕事]

上の兄（應烈さん）は、戦争が終わったら徴用から帰ってきて、それ以降は学校には行かず、仕事をどこからか探してきてやっていました。一時期、アメリカ軍の運転手をしていて、ジープを運転していました。ジープなんて近所の人たちも見たことがないから、家の近くまで来ると、子ども達がみんな集まって見に行ったりしました。チョコレートを持って帰ってきてくれたこともありました。

両親は、ニコヨンって言ってね、渋谷の職業安定所に行くと、派遣先を言われて仕事に行くんです。最初は二人で行っていましたが、そのうちアボジが身体をこわしてしまって、オモニが一人で行くようになりました。それを聞いて埼玉に住んでいた知り合いがうちに寝泊まりをするようになりました。アボジの失対手帳を使って、仕事をもらいにオモニと一緒に行くようになったんです。手帳には顔写真なんかないので、違う人が行ってもばれなかったんでしょう。みなさん、食べていくのに必死だったのだと思います。

應烈さんが戦後すぐ米軍関係者のジープの運転を担ったということは、戦時中、徴用先で運転技術を身につけたということであろう。56歳で解放を迎えた父は、東京都の失業対策事業に従事するが、とりわけ男性の派遣先は肉体労働であることが多く、間もなく身体をこわしてしまう。それ以降、父はいつも臥せがちで、「ついで元気になることはなかった」と言う。失業対策手帳には永俊さんが働き続けたことが記録されていたとしても、それは別人の労働の記録なのである。

このような家族の状況の中で、長男の應烈さんは一家の家計を支えるべく尽力し、そこには弟に勉学の道を開いたという一面もある。解放時13歳だった末子さんの次兄の應大さんは、そのまま日本の学校に通い続けた。

ところで、植民地支配からの解放により、光州への帰国を考えることはなかったのか。不思議なほど両親の記憶の語りの中に故郷の話は出てこない。手紙

や金品のやりとりはなかったのか。そう問いかけた筆者に、末子さんは「まだ子どもだったから聞かされていなかっただけかもしれないが」と留保した上で、少なくとも末子さんの記憶の中に、祖父母の話はないと言う。「私が物心つく頃にはハラボジ、ホルモンは亡くなっていたのではないかと思います」とのことだった。20年間あまり日本で暮らし、家には下は3歳から16歳までの子どもが四人いる。嫁いだ長女の家族も戦災で身を寄せている。体調もはかばかしくない。そのような状況の中で、永俊さんには、家財を畳んで光州に帰るといふ道は考えにくかったことだろう。

母は家計の足しにと、どぶろく（濁酒）づくりを始めた。父がまだ仕事に行っていたときは、松亭さんがつくるどぶろくを「唯一の楽しみにしていた」と末子さんはふり返る。

[抜粋8：どぶろくづくり]

父は仕事から帰ってきて、母がつくったどぶろくを一杯飲むのを楽しみにしていました。私はまだ小さかったですけど、お水で薄めてお砂糖を入れて飲ませてくれました。甘酒のようで美味しいの。父は静かに飲んで、ごろっと寝てしまうという感じです。母と姉と私が女三人でおしゃべりに夢中になると、咳払いが聞こえてくる。やかましいのが嫌いなんです。それで、私たちはハッとして、ピタッと静かになる。（中略）

母のどぶろくは近所でも評判でいろんな人が飲みに来ていました。駒沢中学の先生方もよく来ていました。飲んで騒ぐ人はいなくて静かに飲んで帰って行かれていました。どぶろくは闇酒で違法でしたから、摘発ってのがあるんです。でも、それも来る前にこっそり教えてくれる人がいて、うしろが川（蛇崩川）だから、それを聞いたら全部流してしまいます。そういう時は惜しげも無く、ばあっとね。

その時は、おつまみと言っても簡単なもの。たとえば、キムチを漬けるときに、煮干しをゆでて出汁を取るんですけど、その出汁を取ったあとの煮干しを捨てないで、味付けして出していました。手軽なものですけど、けっこう

美味しいもんですよ。

十条の朝鮮学校¹³⁾に通うようになって、いろんな地域の人たちと出会って、話を聞くようになったら、家でどぶろくをつくっていた家庭では、娘がお客さんにお酌をしたという話も聞きました。それを聞いたときに、うちはそういうことは一切させなかったなって思いました。そうしていたら、もっと流行ったのかもしれないけど、両親は子ども達にさせなかったですね。

松亭さんのどぶろくは地域でも評判の味で、1949年生まれの子成さんの記憶にも残っている。飲みに来るのは日本人も少なくない。上の子ども達が通った学校の先生達も来ていたし、つい最近も、千里の営業中に日本人女性から「昔、どぶろくを分けてもらってましたよ」と声をかけられることがあったという¹⁴⁾。

(4) 近所づきあい

家庭内の言語使用を語る場面（抜粋3）においても、河家の周辺に朝鮮人の世帯があったことを確認した。河家が暮らす四軒長屋にはいずれも朝鮮人の家族が暮らしていたそうだが、その一番端に暮らす河家の、長屋とは反対側の隣は日本人家族が暮らしていた。

[抜粋9：お隣さん]

うちの隣は日本人のご家族で、立派なお家で、うちと接している方面に洋間があったので「洋館だ、西洋館だ」ってよく言っていました。戦争中、娘さんが結婚するはずだった人が戦死してしまって、嘆き悲しんで、だんだんと精神を病んでしまいました。今は、世の中で理解がありますけど、あの当時は「きちがい」と言われてしまう時代でした。とても可哀想なことでした。

13) 抜粋12参照。

14) 第一部、pp.155-156。

本当に戦争は悲惨なことです。巻き込まれた国の国民みんなを不幸にすることです。

そのお宅は、私が物心つく頃には、お母さんもいなくて、お父さんと娘さんの二人暮らしでした。(戦後は)お父さんが渋谷の方に、屋台をひいておでんを売りに行って生計を立てていました。帰ってくると「残り物ですみませんけど」って、よくおでんをくれました。うちではおでんはつくらないから、おでんはお隣さんにいただいた時に食べるものになりました。おいしかったですよ。

どのような事情があって、父娘の二人暮らしになったのか、末子さんは知らないが、家屋は「洋間のある立派な家」だった。戦後は、家長が渋谷に屋台を引いて生計を立てていたということは、職業的にも家庭的にも複雑な事情があったことが想像される。末子さんの母が漬けるキムチやどぶろくは、日本人にも分けていたというから(抜粋2、抜粋8)、「売れ残りのおでん」はそのお返しという側面もあったことだろう。

かつて永俊さんが家の周りに植えた柿の木の話からも、お隣さんとの関係がうかがえる。

[抜粋10：柿の木]

父が、うちの前と横(隣の家との間)に、柿の木を1本ずつ植えました。それが、ごまの入った甘いまあい柿になるんです。昔は測量なんてしないから、家の横に柿の木を植えたら、それが隣の家土地だったって後でわかったんです。それから、お隣さんに「取って食べてください。両側から取って食べましょう。こっち側になった柿はうちで、そちら側になった柿はお宅で食べてください」ってしたんです。昔は果物屋さんなんてなくて、みんな家で育てたものを、近所の人たちで分け合って食べていたんですよ。

近所づきあいを良好にしていたのには、松亭さんの人柄や性質もあったこと

だろうが、料理の腕がものをいったようである。

[抜粋 11：料理とおもてなし]

昔は結婚式でも葬式でも家でやりますから、お料理を振る舞わないといけない。渋谷にお料理が上手で、暮らしも裕福な奥さま方がいて、何かあるとその人達を呼んで、料理をつくってもらいます。その手伝いに母もよく行っていました。そんな時は余った料理を持って帰ってきてくれて、私たちもお相伴にあずかりました。

うちで何かのお祝いをしたときも、その方達にお料理を頼みましたが、「ここは仕事がしやすい」って言っていたのを覚えています。なぜかって、すべての準備が出来ているから。「他の家行ってから一から全部やらないといけない、ここは必要な下ごしらえが万端にできてから、すぐに料理に取りかかれる」って。それは母が何度もお手伝いに行っていたから、何が必要か知っていたということなんです。手先が器用で、仕事が早くて、几帳面で丁寧にやるから、その方達にとてもよく可愛がってもらっていました。そういうことの延長に、今の千里があるのかなと思います。

下線を付した、渋谷の「お料理が上手で、暮らしも裕福な奥さま方」というのは、朝鮮料理家の申小南氏（故人）を中心とした数人の女性グループのことである。申小南氏は、のちに『家庭でつくる朝鮮料理』を監修する¹⁵⁾。そこに記されている来歴は以下のとおりである。

監修者プロフィール

申小南 1921年全羅北道に生まれる。1941年来日。両班（貴族）の家に生まれた豊かな食体験を生かし、プロから家庭の主婦に至るまで、幅広く朝鮮料理の後進の指導にあたる。とくに宮廷料理に造詣が深く、日本での

15) 曹甲連と共著、学文社、1985年。

第一人者として信望を集めている。

(「はじめに」下段)

松亭さんが、料理の手伝いによって申小南氏らと親交を深めたのは、解放後のことであろう。申小南氏を中心とした全羅道出身の女性達は、渋谷・世田谷地域の同胞家庭で冠婚葬祭があると、料理人として出向いた。その手伝いとして松亭さんも同行したということである。彼女たちが食材を持ち込む場合は、青山の紀ノ國屋（1910年創業）で仕入れたもので「食材からしていい」ものだったと言う。また、松亭さんも含め、料理人の女性達は「いつもチマチョゴリを着ていた」そうだ。松亭さんは助手の立場とはいえ、年齢は申小南氏の25歳年長である。在日歴も長い松亭さんから学んだことも、おそらくあり、松亭さん経由で、申小南氏の出張調理を頼む同胞も、きっといたことだろう。後に松亭さんが逝去した時（1985年）には、申小南氏が千里の厨房で調理し、弔問客に料理を振る舞ったそうである。

(5) 学校生活

解放後すぐに通い始めた寺子屋（国語講習所）で、本名の朝鮮語読みを知らなかったということで、強く叱責された末子さんは（抜粋6）、教育を受ける機会がないままに過ごしていた。再び学校に通うようになったのは、1948年で、それは昭弘さんが小学校1年生にあがるタイミングでもあった。

[抜粋12：朝鮮学校]

そのうち学校から何回も呼びに来るようになったんです。解放されて、民族教育が始まったんだから来なさいと言われて。地域の人たちがお金を出し合って寺子屋ではなくて学校を建てたんです。第一から第二、第三と。で、うちの周りの人たちは第八。私は6年生で入りました。その時、弟（昭弘さん）は1年生でした。

東京朝鮮第八初級学校の『五十周年誌』には、歴代の卒業写真が収録されている。第三期生の中に末子さんの写真と名前が掲載されている。

ここで朝鮮学校の歴史を簡単に確認しておきたい。それぞれの地域で、寺や学校、工場などの一部を間借りして始められた国語講習所は、学習環境の面で「学校」と呼べるものではなかった。運動や集会をする校庭も体育館もない。自分たちの学校をつくるのが在日朝鮮人の大人達の喫緊の課題となった。学校を創設するには、まず土地や建物が必要となる。それから、教員の養成、教科書の編纂、教具の準備など、課題は山積みである。民族組織の在日本朝鮮人聯盟（1945年10月結成、略称「朝連」）を中心に、やるべきことをできるところから取り組むという様相だった。この動きに対する日本政府の反応も、流動的で一貫性がなかった。1948年からGHQ/SCAPおよび日本政府側から、圧力や制限がかかるようになる。これに対し、朝鮮人側は集团的・組織的な抗議活動へと発展した。とりわけ関西での衝突は熾烈さをきわめ、警官隊と衝突した阪神教育闘争へとつながった。この時、16歳の朝鮮人青年が警察の発砲で犠牲になったことは（1948年4月24日）、忘れがたい悲劇として記録され、在日朝鮮人コミュニティの「恨」として記憶され、語り継がれている¹⁶⁾。

このように、末子さんと昭弘さんが朝鮮学校に通い始めた1948年は、学校を取り巻く環境もきわめて不安定な時代だった。翌1949年、初級学校を卒業した末子さんは北区十条の東京朝鮮人中学校に進学した。

中学校についても設立当初の様子を確認しておきたい。全国に初等教育機関を設立させたのち、続く課題は朝鮮中学校の創設であった。1946年9月5日に目黒雅叙園で設立期成会を開催、有志より136万5100円の寄付が集まった。それを財政基盤に校地の確保が検討され、旧日本軍の板橋造兵廠の使用権を得るに至った。同年10月5日の開校式の様子は以下のように記録されている。

風雨にさらされながら放置され、荒れるにまかされていた旧日本軍の施設・建

16) 東京青山霊園「解放運動無名戦士の墓」に合祀されている。

物をそのまま学校として使用しはじめた当時の状況は、話にならないほどひどいものであった。屋根はトタン張りであり、部屋の天井はもちろんなかった。……机と椅子は床がなかったため土の上にそのまま並べられていた……校庭の側面には連合国軍の射撃場があり、兵士の射撃訓練が実弾で日々行われていた。

(金徳龍 2002, pp.66-67) ¹⁷⁾

教育活動と同時進行で地面をならす作業や建物の修繕が行われた。末子さんが入学した 1949 年も金徳龍が描写する「学校づくり」の途上にあったことだろう。1947 年 9 月によく女子寮が設置され、主に関東一円から女子学生も集まるようになった。中学入学を機会に、末子さんが近所以外の在日朝鮮人の暮らしに触れるようになったことは、抜粋 8 で見たとおりである。

中学に入学した頃の様子を末子さんは以下のように語る。

[抜粋 13：中級学校]

第八は初級学校（小学校）だけでしたから、中学（中級学校）は十条まで通いました。学校では日本語を話してはいけないのですが、私は家の中も日本語で話していたので、朝鮮語が上手じゃなくて、いつもびくびくしていました。出来ないと怒られたり、居残りをさせられたりするんです。その頃、学校には日本人の先生と朝鮮人の先生がいました。日本人の先生は日本語で教えていました。日本人の先生の中には、怖くて苦手な先生もいれば、優しく好きな先生もいる。それは何人だからということではなくて、人間ってそういうものじゃないですか。

末子さんが東京朝鮮中学校に通い始めた 1949 年は、全国の朝鮮学校にもっとも圧力がかけられた時代でもあった。同年 9 月、民族教育の推進母体の朝連に解散命令が出され、続いて 10 月には学校を強制的に解散させる目的の各

17) 金徳龍『朝鮮学校の戦後史——1945-1972』社会評論社、2002 年、p.66。

種発令が、文部省から出された。東京都は都内の朝鮮学校に都立学校認可申請の手続きをさせ、「東京都立朝鮮人学校設置規則」（12月17日制定）に基づき、日本の教職員免許を保持する日本人教員を専任教員として着任させた¹⁸⁾。従来からいた朝鮮人教員は、時間講師として雇われ、安い報酬、不安定な地位で教壇に立つことになったのである。末子さんの記憶の中に、日本語で教える日本人の先生と、朝鮮語で厳しく教える朝鮮人の先生の記憶がある（抜粋13、下線部）のは、このためである。

[抜粋14：学校生活]

中学生の時にね、私は学校へ行くのが嫌になっちゃった時期があって、しばらく不登校になったんです。その間、埼玉の懇意にしていた人の家に行っちゃってしばらく帰らなかった。何か嫌なことがあったとか、はっきりした理由があったわけじゃないんですけど、思春期特有の不安定な部分があったのかな。

それで、義理の兄が迎えに来て、呼び戻されて、学校に戻ったときに、クラスのお財布を預かる、会計の担当になったんです。私の几帳面な性質を見て、会計を任せるといって気づいてくれた先生がいたんだと思います。それから学校も通うようになりました。合唱部に所属して、歌を歌うことも好きになりました。公民館の大きな舞台で歌ったこともありました。

末子さんは再び「不登校」になる。寺子屋（国語講習所）での経験（抜粋6）とは異なり、学校に行かなくなっていくさつについて「何か嫌なことがあったとか、はっきりした理由があったわけではない」（抜粋14、下線部）と言う。末子さんが通った都立移管時代（1949年12月～1955年3月まで）は、教育の要となる先生をはじめ、学校関係者の状況も不安定で、とりわけその初期は同僚どうしても猜疑心に満ちていたことが当時の日本人教員の記録¹⁹⁾に

18) 前掲書、pp.80-81。

19) 梶井陟『都立朝鮮人学校の日本人教師 1950-1955』岩波書店、2014年。

残されている。直接嫌なことを経験しなくても、その殺伐とした雰囲気と思春期の末子さんを感じ取り、学校からも家からも退避せざるを得なかったのかもしれない。

他方で、そのような不安定な状況の中で、末子さんの特性を見極め、会計を任せるというアイデアを提案し、自尊心を高められるように工夫した教員がいた。あるいは、共に歌を歌い、大きな舞台に立つ機会をつくった教員の存在があったこともうかがえる。そうした経験の中で、末子さんは、信頼できる人かどうかは、何語で教育を行うかや、「何人だからということではない」（抜粋13、下線部）という視点を学び取っている。

中学校生活の後半で、ようやく年齢相応の学校生活を謳歌できるようになった末子さんだったが、高校進学は固辞した。

[抜粋 15：進学と勉強]

下の兄（應大さん）が大学へ行っている。学費がすごくかかって両親が苦労しているのが分かっている。それで私は中学を卒業する時「それ以上は行かない、勉強は嫌いだから」って言ったんです。「高校へは進学しない」って。小学校の時の先生が説得にも来たけれど、「学校が嫌い」って理由にして断りました。でも内心は学費のことが気になってね。そっちの心配の方が大きかったんです。

結婚してから主人が「あなたが子ども達に「勉強しなさい」って言うのを聞いたことがない」と言ったことがありました。私は「言う必要があると思うなら、あなたが言ってください」って言いました。「勉強は強制されてやるもんじゃないと思います」って言いました。屁理屈に聞こえるかもわかりませんが、私はそう思っています。

でも、主人にそう言われた時に、私は「勉強が嫌い」って言って進学しなかったんですけど、本当は勉強は好きだったなって気づきました。主人は新聞を読むのが好きで、朝早く起きて新聞を読むのが日課でした。私に「こういう記事が出ていたよ」と教えてくれるので、それを聞いて、私も後から読

むようになりました。大人になってからですけど、それが勉強の習慣になりました。今でも続けています。

それに、ふり返ったら、結婚して、そのまま子育てしましたが、足し算と引き算ができれば買い物はできるんだから、これはこれでいいんだわって楽観的に考えるの。だからね、主人に感謝しているんです。

末子さんには、小学校から中学校の学齢期において、学校に馴染めずにいた時期があったことも確かである。それが、中学を卒業する頃には、自分の強みや好きなことを見つけ、学校生活を楽しく過ごせるようになっていた。しかし、末さんは高校進学を断念する。表面的には自分の意思で拒絶したが、本当は家の経済状況を心配してのことだった。末さんが朝鮮中級学校3年生の時、4歳年上の兄の應大さんは大学1年生だった。周囲には、「(親は)無学のくせに子どもを日本の大学に行かせるなんて」と笑う人もいたのだとふり返る。末さんは、そう言う大人の声に、冷淡な嘲りが含まれていたことを敏感に感じ取っていたようだ。これ以上、親に負担をかけるわけにはいかない、という気持ち勝ち勝ったのだと言う。

「勉強も学校も嫌い」と言って高校進学を拒否した末子さんだが、結婚し、子育て中にかけて夫の言葉をきっかけに、「勉強は嫌いではなかった」ことに改めて気づいたとふり返る。それは、子どもの勉学について、親がどう働きかけるべきかを巡って夫婦間の見解の違いが明るみに出たことから誘発されたものだとするが、それと併せて、新聞を読むことが日課になっていたことと結びついて生じた気づきだったと語られている。

結婚してから末さんは、夫の影響で新聞を読むようになった。その習慣によって末さんは、新しい語彙や概念、文章や表現、政治や社会についての理解を深めた。そのことが楽しく、意味のあることだと感じられ、「本当は勉強が好きだった」(抜粋15, 下線部)自分に気づいた。それが、勉強は「人から強制されてやるものではない」(抜粋15, 下線部)と漠然ともっていた信条と結びついた時、確信となった。あの時、高校に進学する道を選んでいれば、ま

た違う未来が開けたのかもしれない。子育てに明け暮れながら、自分なりの勉強法を見出すことが出来た来し方をふり返り、「これはこれでいいんだわ」（抜粋 15、下線部）と自分の歩んできた道を肯定している。新聞を読むという習慣は、夫が他界した後も、88歳になった今も続けている。

（6）弟（昭弘さん）の死と兄（應烈さん）の結婚

日本各地で朝鮮学校が精力的に整えられていたさなか、その勢いを挫くように、あるいはその勢いへの警戒心と GHQ/SCAP の在日朝鮮人に対する方針転換などにより、急速に弾圧が厳しくなっていった。そのような時期に学校に通い始めた末子さんと昭弘さんだった。

1948年11月19日、取り返しのつかない事故が起きた。そして河家の日常は大きく変わってしまった。

〔抜粋 16：弟の事故〕

私が6年生で、弟（昭弘さん）が1年生でした。雨の降っている日でした。私たちは毎日一緒に学校に行っていました。その日は、私が学校で居残りになってしまって、弟が先にひとりで帰ったんです。玉電で降りる駅をひとつ間違えてしまったんです。ひとつ先の駅まで行ってしまったんです。傘をさしながら、家の前の道路を歩いていたときに、事業所に入ろうとして曲がってきた大型車にひかれてしまいました。

その大型車には運転手と助手席に二人が乗っていて、普段だったら、助手席の人が降りて安全確認をして誘導するはずだったそうです。その日は雨が降っていたということもあって、その作業を怠ってしまったということでした。不運と不運が重なったんです。

弟は頭の脳の部分をはかれてしまって即死だったそうです。学校の先生もすぐに駆けつけました。唯一さいわいだったことは、顔がきれいだったことです。母が泣きながら、ずっと弟を抱いて頭をなでていた、その姿が目焼き付いて今でも離れません。

その大型車の運転をしていた人と会社の人が、家に謝りに来た時に、普段は温厚で、声をあげたことなど一切ない父が、怒りに震えて、小屋に走り込んで行きました。手に斧を握りしめていました。

朝鮮では、子どもに不幸があると、葬式はあまり大きくしないんです。縁起が悪いと考えるようです。弟のお葬式はとても大きくやりました。「こんなに大きくするんだね」と参列に来た人が言うのを聞きました。私は、どうしてこんなことになってしまったんだろう。私の名前が末子だから？と自分を責めたり、考え込んでしまったりしました。

事故以降、父は、雨が降ると「傘はしっかり前が見えるようにささないといけないよ。濡れてもいいんだから、前を見ずに歩くことがないように」と口癖のように子ども達に言い聞かせるようになりました。

自分の名前の朝鮮語読みを知らずに、強く叱責されたことをきっかけに、学校に通わずにいた末子さんは（抜粋6）、再び学校に通い始める。それは「民族教育が始まったから」と促されたからだと言われている（抜粋12）。同時に、それは弟が小学校に就学する年でもあった。三宿に新設された朝鮮学校へは電車通学である。6年生の末子さんの存在は、1年生の昭弘さんにとって心強い存在だったに違いない。両親にも、末子さんが一緒なら安心だという思いがあったことだろう。

しかし、その日、末子さんは「居残り」をさせられ、1年生の弟はひとりで帰宅した。入学から半年以上経っており通学には慣れていたはずであろう。雨が降り、視界が悪かったことも、降りる駅を間違えてしまったことにつながったのかもしれない。痛ましい事故が起きてしまった。責任は間違いなくトラックを運転していた運転手と、確認を怠った同乗者であるのに、末子さんは、弟の宿命を自分の名前との関連づけて思い悩んだのだとふり返る。76年を経て、「不運と不運が重なったんです」（抜粋16、下線部）と結ぶ末子さんの声に、誰かを責めるような語調は感じられない。

12歳だった末子さんは、いつも穏やかで平静な父親が、怒りに震える姿を

初めて見たと言う。小屋に走り込み、斧を手に握りしめて立ち尽くしていた姿が末子さんの記憶に残っている。なんとか衝動を抑えたのであろう。その後、父は床に臥せるようになり、ついぞ元気になることはなかったのだと言う。それでも、このような忌まわしい事故が二度と起こらないようにと、雨が降ると子ども達に傘のさしかたを繰り返し言うようになった。永俊さんは、雨が降る度に、この日のことを思い出していたことだろう。

[抜粋 17：兄、應烈さんの結婚]

弟のことがあって、それまで占いか一切やらなかった母が、親戚の人にすすめられて祈祷師に来てもらって見てもらったんです。家にその人が来た時に、母は私に「外で遊んで来なさい」と言ったんですけど、私は気になって、こっそり見に戻ったんです。そうしたらお祓いをしていました。後にも先にも母が祈祷師に頼ったのはその時だけでした。それで、「お祝い事をした方がいいよ」と言われて、翌年に上の兄（應烈さん）が結婚することになったんです。本人の意思に関係なく、結婚させられました。

11月に不幸があり、その数ヶ月後には長男の應烈さんは崔順子さんと結婚する。そして1949年12月28日に順子さんは男児を出産する。その子が現在の河家の家長の孝成さんである。末子さんは、「穏やかな今があることを思えば、これで良かったんですけど、(当時の)兄は辛かっただろうと思います」と應烈さんの早すぎる、本人達の意思によらない結婚に思いを馳せる。

4. 考察：悲しみの転換と温存

本稿では、河家のファミリー・ライフストーリーについて、河末子さんの視点から編んだ。末子さんの幼少期から中学を卒業する頃までで、年代で言えば1940年代の出来事が中心となっている。在日朝鮮人の歴史でいえば、日本の帝国主義化に伴う搾取、皇民化教育、日本の敗戦による朝鮮半島の解放、在日朝鮮人達の祖国への帰国、民族教育の始動とそれへのGHQ/SCAPおよび日本政府による弾圧、朝鮮戦争の予兆などが中核となる。河家の暮らしも、これらと密接であったことが、末子さんの来し方の語りを確認することができる。

他方で、末子さんの語りの中で、全編を通して重要な位置を占めたと印象づけられるものがいくつかあった。それは、繰り返し語られたことであったり²⁰⁾、一見関連がなさそうな出来事と出来事をつなぐエピソードであったりする。それらの中のひとつが、弟、昭弘さんの事故死についての語り〔抜粋16〕であった。

この出来事の語りは、筆者が末子さんと初めて出会った日に語られたことであった。これまでにまとめた河家のライフストーリーの一部を手渡し（注1）、このような形でこれから昔の出来事について聞かせていただきたいと伝えた直後にこの話をされた。末子さんは途中、声を詰まらせ、「この日のことを思い出すと今でも涙が溢れ、胸が張り裂けそうになるので、これ以上は話すことができません」と言った。しばらく沈黙が続いた。このようなことがあったから、筆者はその後のインタビューは実現しないかもしれないとさえ予感したのである。

末子さんはその後、インタビューに応じてくださった。何度も面談する中で、「弟のこと」と言うことはあっても、当時の出来事を具体的に語り直すことはなかった。筆者も末子さんが「弟のこと」と言う時には、「昭弘さんの事故死」を指していると了解し、そのことについて改めて聞くということはしな

20) 一例として、新聞を読むことについては、抜粋15以外の場面でも、さまざまな出来事と結びつけて繰り返し語られた。そのことの意味については稿を改めて論じたい。

った。ただし、「弟のこと」は末子さんのライフストーリーに、常についてまわっているという印象をもった。

数回のインタビューを終え、「次回はこれまでのインタビューを文字にしてお持ちしたい」と伝えた時、続けて私は「悲しい出来事についても記録しましょうか」と尋ねた。末子さんは黙って小さく頷いた。「悲しい出来事」はいくつかあったが、ここでの意味が「昭弘さんの事故死についての記録を含める」という意味であることは、私たちの間で疑いなく了解済みであると感じられた。最初にお聞きしたストーリーを、(録音はしていないため)私の記憶に頼って文字化し、それを讀んだ上で末子さんが語り直し、整えたものが[抜粋16]である。

この出来事について、すでに刊行している第一部から抜粋する。

永俊さんの子ども達も、電車通学で朝鮮学校に通い始めた。一家の、世田谷での生活は、光州での暮らしのように、死に直結するほどの餓えの苦しみはなくなった。しかし、戦後復興が急がれる都市の生活では、思いもよらない大事故に遭遇することもある。1948年11月19日、雨が降る日だった。昭弘くんが、学校から帰る途中、家の前の通りでトラックにはねられ、還らぬ人となった。朝鮮初級学校の1年生だった。

幼い我が子を失い、嘆き悲しんだ松亭さんは、お祓い師をたずねた。お祓い師は「長男が結婚したら、その(亡くした)子にそっくりの男の子が生まれるよ」と告げたそうだ。その翌年(1949年)、應烈さんは松亭さんが探してきた崔順子(チェスンジャ)さんと結婚し、その年の暮れに男児を授かった。

(猿橋 2023, p.152、下線は筆者)

上記において、昭弘さんの事故は、戦後復興と開発により交通量が増える都市生活の影響と、我が子を失い嘆き悲しむ母の視点(下線部)で描かれている。他方で、[抜粋16]は、昭弘さんの姉であり、語り手の末子さんの視点で出来事が詳細に語られている。両者を読み比べると、松亭さんがお祓い師をたずね

たのではなく、家に来てもらったという事実の相違も認められる。加えて、何よりも大きく異なる語りは、父親の永俊さんについてであろう。

[抜粋 16] において、永俊さんへの言及は二箇所ある。ひとつは運送会社の人が謝罪に来た時のやり場のない怒りの浸出であり、もうひとつは子ども達へ言い諭すようになった教訓（雨の日の傘のさし方）についてである。後者は末子さんにお会いした日、河家の皆がいるところで語られた。前者は私が記録を届けた後に加えられた語りであった。加害者が謝罪に来た時、居ても立ってもいられず小屋に走り込み、斧を手にして立ち尽くしていた父の姿を、末子さんは語り加えた。

河家のファミリー・ライフストーリーにおいて、永俊さんは、肉体労働に携わりながら、周囲からは一目置かれる人物として記憶されている。戦後は仕事がなく、東京都の失業対策事業（1949年～）に就いた。間もなく身体をこわし、それ以降、一度も体調が回復することはなく、終生臥せっていたと末子さんは回想する。永俊さんは朝鮮半島では農民として、日本に渡ってからは「人夫」として、長年、肉体労働に従事し家族を養った。病に倒れたのには、年齢を重ねたこともあろう。他方で、その数年前（1948年末）、幼な子の事故死に、常に穏やかだった父が憤怒に震える様を垣間見た、当時12歳だった末子さんがいた。

末子さんがいつの時点で、息子の命を奪った者に対峙した時の父の姿を思い出し、なぜ、いつの時点でその記憶を語ろうと決めたのかは分からない。弟の事故と父の病気。二つの出来事の因果関係など、誰にも解明のしようもないし、末子さんは二つの出来事を関連づけて語ることはしなかった。76年前の事故について末子さんは「不運と不運が重なったんです」（抜粋 16、下線部）と結び、加害者を責める言葉は一切発さなかった。しかし、こうしてファミリー・ライフストーリーをまとめている私の観点からは、昭弘さんの事故死と永俊さんの病というふたつの出来事の間には、原因と結果という関係が、埋め込まれてるように思えてならない。

第一部には、永俊さん、松亭さんが並んで映っている写真を掲載している

(p.150, 図2)。永俊さんは小柄で痩身、穏やかな笑みを浮かべ、カメラは直視せず、すこし伏し目がちな表情に慎ましさが感じられる。二人の後ろには次男の應大さん、前には長女、應禮さんの息子（二人にとっては孫）が映っており、皆が明るくにこやかな表情である。末子さんは、元気だった頃の父の容姿について「普段はそんな格好しませんが、何かある時にスーツを着て、烏打ち帽なんかかぶったりするとなかなかお洒落で上品に見えました。私ね、心の中で父は昭和天皇に似てるって思っていたの」と、後半は茶目っ気を含んだ表情で付け加えた。書籍の中だけで日本帝国主義、植民地支配や皇民化教育等の歴史を学んできた私は面くらい、返答に窮した場面でもあった。しかし、今、改めて1949年に撮影されたというその写真を見ると、「なるほど、言われてみると確かに似ているかもしれない。それどころか、ずっとやさしく思慮深く見える」と思ったりもしている。

河家は、1948年、幼い命を交通事故で奪われるという惨事に遭った。それを祝い事に転換して乗り越え、その転換によって今の河家がある。同時に、家族の中には、悲しみを悲しみのまま、一身に溜めおいた人がいたのだと思う。それが、河永俊さんの生きざまだったのではないかと考えている。

〈つづく〉